

令和5年度
入 学 試 験 問 題

第2回
国 語

- 1 問題用紙は監督者^{かんとくしゃ}の指示があるまでは開いてはいけません。
- 2 開始のチャイムが鳴ったら、最初に問題用紙と解答用紙に受験番号と氏名を記入して下さい。
- 3 答えはすべて解答用紙に記入して下さい。
- 4 記述で答える問題は、特に指定のない場合、句読点^{くとうてん}や符号^{ふごう}は一字として数えるものとします。
- 5 問題は1ページから18ページまであります。

受 験 番 号		氏 名	
------------------	--	----------------	--

森村学園中等部

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

21世紀、社会で働く女性が増えた。同時に、物語のなかでも「働くヒロイン」はさまざまな形で登場する。

たとえば『ブラダを着た悪魔』(2006)や『キューティ・ブロンド』(2001)を挙げるまでもなく、ハリウッド映画にも働く女性の自己実現ストーリーはそこらじゅうに転がっている。「働く女性モノ」と名付けてもいいかもしれない。

最近では、『ズートピア』(2016)のような、動物が主人公のディズニー映画であっても、ヒロインは働いている。さらに日本でも映画『若おかみは小学生!』(2018)という、まだ小さい子どもが働く物語がヒットしていたりする。単に「働くヒロイン」を描いた物語なら枚挙に暇がない。①というか特段取り立てて扱うべきでもないほど、普通のことだ。

しかし現実では、女性が社会で働くことに何の障害もないのかといわれれば、そんなこともない。

日本でも男女の平均賃金は異なっているし、女性の会社員のなかでも非正規と正規という雇用形態の違いが存在する。②このような状態を、物語の働くヒロインたちは、どのように表象しているのだろうか。本章では、「働くヒロイン」に注目してみたい。

働くヒロイン。と聞けば、思いつくのはNYのど真ん中で、ハイヒールの踵の音を鳴らしつつ、スカートで闊歩する女性! かもしれない。思わず「!」をつけたくなるような緊張感のある女性キャラクター。もはや死語かもしれないが、「キャリアウーマン」と評されるような女性。「バリキャリ」という単語のほうが適切かもしれない。

I 働くヒロインだからといってバリキャリとは限らない。実は働くヒロインほど、時代の影響を受けるキャラクターはいないのだ。たとえば、あなたの元祖「働くヒロイン」は誰だろうか。朝ドラでいえば『おしん』? 児童小説だと『小公女』や『マッチ売りの少女』? 時代を反映するヒロイン像を描くディズニー・プリンセスのなかで考えてみると、実は「シンデレラ」ではないだろうか。

いわゆる古典的なディズニー・プリンセスの中で、「労働する場面」から入るのは彼女だけだ。『シンデレラ』のヒロインは、金銭を受け取って稼いでいるわけではないが、間違いなく家事労働をさせられている。シンデレラは家事労働によつて家にいることを許されていた。考えてみると、専業主婦的なキャラクターでもあり、一方で住み込みの家政婦のようなキャラクターでもある。

II 『シンデレラ』が「働くヒロイン」の話だ、という違和感を持つ人もいるかもしれない。これはなぜかといえば『シンデレラ』の物語そのものが「働くことから脱出する」物語だからだ。それがシンデレラストーリーという言葉の意味ですらある。

彼女は働かざるをえなかった少女時代から、王子様に見出され、働かなくていいお姫様という身分になる。シンデレラは「恋愛によって労働しなくていい身分になる」ヒロインなのだ。

現在シンデレラストーリーというと、「突然、普通の女の子が可能性を見出されてチャンスをつかむ」といった意味で使われることが多

い。たとえば芸能界で突然大人気になることをたまに「シンデレラストーリー」なんて表現したりする。それはどちらかというと、より働く機会をもらうことを指す。しかしそもそもシンデレラは、「働かなくていい身分」になることがゴールだった。

それがハッピーエンドとされるのは、シンデレラにとって家事労働が苦役^{くえき}だったからだ。お金ももらえず、自分の時間を家族のために使う労働。彼女は王子様と恋愛することでそこから抜け出す^{ぬだ}ことができた。

恋愛によって労働を脱出するヒロイン。それが長らく女性の憧れ^{あこが}とされるヒロインだったのだ。

しかし『シンデレラ』の映画公開と同じく20世紀初めのアメリカでは、まったく違うパターンの「働くヒロイン」の物語も登場する。ウェブスターの『あしながおじさん』だ。

一見『あしながおじさん』も、『シンデレラ』と同じようなストーリーに見える。孤児院^{こじいん}で身よりなく過ごしていた少女が、おじさんに見出されて、突然、階級を上る話。

しかし『あしながおじさん』の場合は、階級を上った先に「労働（＝作家になるという夢）」が存在する。

（中略）

物語の終盤^{しゅうばん}、ジュディは自分のやりたかった作家仕事のチャンスをもろう。あしながおじさんに援助^{えんじよ}してもらった先にあるのは、自己実現としての労働だった。

もちろん作家という仕事は、いわゆる肉体労働やケア労働とされる仕事ではない。しかし自分のしたいことをして、お金をもらう循環^{じゅんかん}を手に入れたことを喜ぶ働くヒロインは、20世紀の初めにすでに登場していたのだ。

そもそもジュディがあしながおじさんに資金援助してもらうきっかけも、彼女の文才^{ぶんさい}だったのだ。容姿や女性らしさではなく、文才によって援助の機会をもらうジュディのあり方は、「働くヒロイン」のまさしく【A】^④と言えるかもしれない。私は『あしながおじさん』という物語の魅力^{みりょく}のひとつは、この女性の労働へのいきいきとしたまなざしにあると思っている。

しかし『シンデレラ』と『あしながおじさん』を見ると、ヒロインが王子様に与えられて喜ぶものとして、一方が「労働から脱出する方法」であり、一方が「自分のしたい労働を手に入れる方法」であるのは示唆^{しそく}的だ。おそらく現実を生きる私たちにとって、それはすっぱりと分けられるものではないのだ。女性にとって「生活のための労働」も「自己実現のための労働」もどちらも必要だった。その境目はグラデーシオンでありながら、だからこそフィクションの「働くヒロイン」にはこの両面が描かれるのだろう。

女性の労働の意味。それが、生活費の担保になるか、自己実現になるか、^⑤働くヒロインの物語は、この二側面をどちらも描いているのだ。

いつか脱出したいものとして労働を捉えるシンデレラ型働くヒロインと、自分の才能を発揮する場として労働を捉えるジュディ型働くヒロ

イン。ここでひとつの解釈を紹介したい。英文学者の三浦玲一^{みうられいいち}はジュディ型ヒロインの労働を「アイデンティティの労働」と呼ぶ。

そこに「生産」はなく、われわれ自身のなかに内在するクリエイティヴィティの実現こそが「富」を産むのである。それは、自己実現こそが富になるというユートピア願望の表明である。

（『村上春樹とポストモダン・ジャパン…グローバル化の文化と文学』）

三浦は、他の論文においても、AKB48のアイドルや『タイタニック』のローズを、アイデンティティ労働の一例として挙げる。ジュディの「作家」という職業は顕著だが、三浦が挙げるようなアイドルの労働、あるいは最近であればSNSを使って自分を売るような労働も、アイデンティティを自分の資産として使う働き方だ。

労働が自分のアイデンティティとなり、そしてそのステージが上がることによって、さらに自己実現が可能になる。『あしながおじさん』を持ち出すまでもなくそのような構造が存在する。AKB48のようなアイドルたちが、グループ内の序列の上位に入ることを楽しんだり、さまざまな歌番組に出られることを喜ぶことは、三浦が指摘する私たちの労働の一例だろう。

（中略）

現代では女性のなかの分断——つまり「専門職中産階級」の女性と、「非正規・低賃金労働者」の女性の格差が広まっている。（中略）シンデレラ型とジュディ型の間に、格差が生まれている時代なのである。

実はこの視点を持ち込むと、日本で長年人気の「働くヒロイン」であるジブリ映画『魔女の宅急便』のキキの印象も変わる。

*^{この}河野は『魔女の宅急便』を、本当はそんなはずなのに、宅急便をあえてクリエイティブな仕事として描いた話として読んでいる。

（中略）

たしかに「空を飛んで物を運ぶ」ことは、普通に考えたらものすごく肉体労働である。低賃金労働かもしれない。ジュディ型とシンデレラ型のどちらかと問われたら、シンデレラ型労働の一例だろう。しかし『魔女の宅急便』で描かれる労働のかたちはたしかに、笑顔を忘れず、心を大切に、みんなの励みになるような存在であることだ。本当だったらキキは必要なかったかもしれない「笑顔」を、労働には必要なものだと母から教えられる。つまりジュディ型労働としてキキは宅急便の仕事を受けとめる。

物語の途中、精神的な理由が関係してキキが空を飛べなくなる描写がある。それはこの映画が宅急便の仕事をアイデンティティ労働と見なしている証だ。

Ⅲ

河野は『魔女の宅急便』のラストシーンも「アイドル」的であると解説する。たしかにスランプに陥ってなかなか飛べなかったキキが、なんとか飛んでみんなを助ける場面をテレビに映されることは、まさしく現代のアイドル的だ。この場面は原作小説にはなく、スタ

ジオジブリのアニメ映画版にのみ登場する。映画ははっきりと、キキの労働を、「自己実現のための労働」つまりジュディ型労働として描くのだ。

では「魔女の宅急便」^⑦業を、必要以上に自己実現的な労働として描くのは、批判されるべきことだろうか？ 私はそうは思わない。前述した通り、やはり労働にはどちらの側面もあり、生活のためでありつつ自分のやりがいのためであることがしばしばあるからだ。

Ⅳ 一方で、よく女性の感情労働は「やりがい搾取」と呼ばれるような、賃金以上の感情の強制を要請^{ようせい}されることがある。キキに求められる「ずっと笑顔でいてくれ」「客にやさしくしてくれ」といった要望も、そのひとつだろう。そう考えると、その描写は簡単に搾取に加担し得る。^⑧働くヒロインの描写は意外と繊細な問題を内包しているのだ。

(三宅香帆『女の子の謎を解く』より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注) *ヒロイン……………登場する女性の中の主たる人物。

*表象する……………考えなどを形にあらわすこと。

*キャリアウーマン……………専門的な知識があり、会社の中でも重要な役割を持っている女性。「バリキャリア」は、「バリバリ働くキャリアウーマン」。

*ジュディ……………『あしながおじさん』の主人公。

*アイデンティティ……………ここでは、「その人にしかない個性や独自性」や、「その人にしかない社会的な価値」というような意味。

*クリエイティビティ……………自分独自の工夫によって、自分にしかつけない新しいものを生み出す力。

*ユートピア願望……………理想が現実のものになってほしいという思い。

*『魔女の宅急便』……………角野栄子の原作小説をもとに、宮崎駿が監督を務め、スタジオジブリが一九八九年に映画化したもの。ヒロインである魔女のキキが、独り立ちする修行のためにある町に住みつき、その町で空を飛んで荷物を届ける仕事をはじめ。

*河野……………英文学者の河野真太郎。

問一 ——— ①「枚挙に暇がない」とありますが、ここではどういうことですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 探し出すことにたいした意味はないということ

イ たくさんありすぎて数えきれないということ

ウ とりとめがなく普段あまり意識しないということ

エ 思い出すのにたいして時間はかからないということ

問二 ——— ②「このような状態」とは、どういう状態ですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 働く女性はかつてより増えてきたが、女性たちが、依然として賃金や雇用形態などの点でいろいろな困難を抱えている状態

イ 女性の社会進出はより進むべきだが、女性たちが、賃金や雇用形態などの困難から社会で活躍することに難しさを感じている状態

ウ 社会で活躍する女性は男性に比べると多くないが、女性たちが、賃金や雇用形態などのいくつかの問題点を克服しつつある状態

エ 仕事をする女性は珍しくなってきたが、女性たちが、賃金や雇用形態などの問題から働くことに積極的になれない状態

問三 ——— ③「それが長らく女性の憧れとされるヒロインだったのだ」とありますが、シンデレラが女性の憧れるヒロインであったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 多くの女性にとって王子様に愛されることは喜びであり、女性たちは、シンデレラが見事に王子様と結ばれて恋を实らせられ

さに深く共感したから。

イ 多くの女性にとって自分らしく働くことは幸せであり、女性たちは、シンデレラが王子様に見出されてチャンスをつかんだことに心おどらせたから。

ウ 多くの女性にとって労働は生活のための義務であり、女性たちは、シンデレラがその義務を代わりに果たしてくれる王子様に愛されたのを幸せなことだと思ったから。

エ 多くの女性にとって生活のための仕事は苦しいと感じるものであり、女性たちは、シンデレラが王子様と結ばれて仕事から解放されたことをうらやましく思ったから。

問四 本文中の「 A 」に当てはまる言葉を、十字で本文中からぬき出しなさい。

問五

——④「女性の労働へのいきいきとしたまなざし」とは、労働をどのようなものとしてとらえるまなざしですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 生活に必要なお金をもらうためのものではなく、お金を支払^{しはら}ってでもやりたいと思えるものであると同時に、以前とはまったく違う自分になるためのもの

イ 生活のために仕方なく行うものではなく、積極的に行いたいやりがいのあるものであると同時に、以前よりもっと望ましい自分になるためのもの

ウ 自分で見つけて選択^{せんたく}するものではなく、他人から与^{あた}えてもらうべきものであると同時に、他人から社会の中で意味のある存在として認めてもらうためのもの

エ 主婦の家事労働のように賃金なしで行うものではなく、生活に必要なお金をもたらしてくれるものであると同時に、社会をより良い方向に変化させていくためのもの

問六

——⑤「働くヒロインの物語は、この二側面をどちらも描^{えが}いているのだ」とありますが、その二側面をどちらも描いているということの例として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 大手企業^{おおてきぎさう}に勤めるAさんは、会社からたくさんお給料をもらっている。仕事はおもしろいと思わないが、稼^{かせ}いだお金で海外旅行に行けるので、今の暮らしには満足している。

イ 大学で児童福祉^{じどうふくし}を学んでいるBさんは、週末に地域の子供食堂でボランティアをしている。その活動は勉強になるうえ、自分が社会の役に立っているという実感を与^{あた}えてくれる。

ウ 幼稚園^{ようちえん}の先生であるCさんは、給料からアパートの家賃^{はら}を払^{はら}って生活している。仕事は決して楽ではないが、かわいい園児たちに囲まれているときには幸せを感じる。

エ なかなか正社員になれないDさんは、アルバイトを三つ掛け持^もちしている。安定した収入を得るために、どんな業種でもいいから正社員になろうと、就職活動がんばっている。

問七 ——— ⑥「三浦が指摘するかたちの労働」とは、どのような労働ですか。その説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 労働することで自分らしさや自分の社会的価値が磨かれ、その労働によって育まれた自分らしさや自分の価値を利用してさらなる富を得る、という労働

イ はじめは労働するために自分らしさを演じ、さらに労働を続けていくうちにそれが本物の自分らしさや自分の社会的価値になっていく、という労働

ウ 富を得るためには他人にはない自分らしさや自分にしかない価値が必要であり、本当の自分を偽ってでも自分を商品化して利益を得る、という労働

エ 他のメンバーと競争することによって自分らしさに磨きがかかり、他の人よりも個性的であることによって最終的に人気を手に入る、という労働

問八 ——— ⑦「『魔女の宅急便』業を、必要以上に自己実現的な労働として描く」とありますが、どういうことですか。「シンデレラ型労働」「ジュディ型労働」という言葉をどちらも用いて、六十字以上七十字以内で答えなさい。

問九 本文中の I ～ IV には、それぞれ接続詞が入ります。 I ～ IV の中で、他の三つとは異なる言葉が当てはまるものを選び、記号で答えなさい。

問十 ——— ⑧「働くヒロインの描写は意外と繊細な問題を内包しているのだ」という部分についての、先生と生徒との会話です。これを読んで、会話文中の空らんには当てはまらないものを一つ選び、記号で答えなさい。

生徒 「先生、この文章の最後に『働くヒロインの描写は意外と繊細な問題を内包しているのだ』と書いてありますが、どういうことかよくわかりません」

先生 「それは、キキのようにやりがいを持って働いているヒロインを描くことが、いわゆる『やりがい搾取』につながる危険性がある、ということだよ」

生徒 「『やりがい搾取』っていうのが難しくてわからないんです。どういうことですか?」

先生 「搾取というのは、ほんとうは乳や果汁などを搾り取るという意味だけど、ここでは働く人から労働力を必要以上に搾り取るという

うことなんだ。たとえば宅急便に従事する人にとっての仕事は、本来ものをお客さんのもとへ届けることであって、その人たちはずっと笑顔でいたり、お客さんにやさしくしたりすることでお金をもらっているわけではないよね。たとえキキが笑顔でいることやお客さんに対してやさしく接することによりがいを持っているとしても、どんなときにも笑顔でいることや、どんなお客さんに對してもやさしくすることを強制するのは、本来の仕事以上の労力を使わせる『やりがい搾取』にあたるんだ」

生徒

「なるほど、わかりました。よく考えてみると『やりがい搾取』は女性に対する感情の強制ということに限らず、とても身近なところでも起りそうですね。たとえば、――」

「としたら、それはやりがい搾取にあたりませんか？」

先生

「その通りだね。仕事にやりがいを持つのはすばらしいことだけど、それがやりがい搾取につながらないように気を付けるということも、これらの時代には必要なかもしれないね」

ア 几帳面な生徒が掃除することが好きだという理由で、四人で行うはずの階段の掃除当番を一人でやることになる

イ 学校の先生がクラブ活動の指導を楽しんでいるという理由で、休日のたびにクラブの指導をすることになる

ウ 演劇部で活動している人が一生懸命に稽古してきたという理由で、部として出場する大会で主役に抜擢されることになる

エ 生徒会の委員が正確に計算できることに誇りを持っているという理由で、予算表の作成にすべての責任を負うことになる

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

和弥^{かずや}はこの中学を受けるか決めてなかったから、第一希望から第三希望まで、父さんと母さんが選んだ。和弥の希望は「サッカー部が強いところ」だったけれど、「サッカー部があればいいんだろ?」と、なんとなくいいかげんな返事だった。

そんなことを考えていたら、先生がやってきて、すぐに授業がはじまった。

教室がしんとして、和弥もあわててノートを開く。

家に帰るのは、八時半くらい。それからご飯を食べて、学校の宿題をして、塾^{じゅく}の宿題をして、お風呂^{ふろ}に入ってから、また続きをやって。こんなことで、いいのかな……。

ふいに疑問が浮^うかぶけれど、じっくり考えるひまなんてないほどへとへとで、机につっぷして寝^ねていることもあった。

それから一か月がたち、二か月がたった。

そんな状態でも続けてこられたのは、サッカーのおかげだ。

^{*かんどく}監督に言^いって、土日だけ参加させてもらっている。試合のときは、応援^{おうえん}するだけだからつまらないけれど、ふだん練習に参加できないから仕方ない。

サッカーをすると、頭がすっきりする。ただ、体のほうはつかれてしまって、宿題をしないまま眠^{ねむ}りこんでしまうことがあった。月曜日に塾に行くと、先生にねちねちと嫌味^{いやみ}を言われた。

「宿題を忘れたって? それでなくても遅^{おく}れているのに、ずいぶんとよゆうじゃないか」

「サッカーが、なんの役に立つわけ? 何かをするためには、何かを我慢^{がまん}しなくちゃダメだと思わない?」

そのときは「くっそ〜!」と思うけど、冷静になると、「そうかもしれない……!」という気になる。

はじめのころは、「無理をしなくていいよ」なんて言^いった母さんも、このごろじゃ、「お金をかけたぶん、がんばらなくちゃね!」と言うようになった。父さんもたまに部屋に来て、「わからないところがあつたら、教えるぞ」なんて声をかけてくる。

塾の費用や親の期待が、ますます肩^{かた}にのしかかってきた。

和弥は、ため息といっしょに、重い気持ちをもみこんだ。

(中略)

「和弥、どこに行くの?」

川ぞいの遊歩道で呼ばれて、顔を上げた。

「あ……」

幼稚園のときから知っている、同じクラスの春香^{はるか}だ。

(中略)

「悪い、急いでいるんだ」

そう言うのと、春香はがっかりした顔をした。

あわてて、「じゃあ」と行こうとしたとき、「レッドフェニックス、学校の校庭で練習してたよ」と言われた。

春香の弟の健斗^{けんと}は、半年前にレッドフェニックスに入ってきた。だから春香も、たまに試合の応援に来ている。

「サッカー、好きだったよね？」

大きな目でたずねられて、ドキッとした。

「今でも好きだ。サッカーがやりたいから……サッカーが強い中学に行くために、勉強してるんじゃないか」

言いわけがましい口調になる。どうしてこんなにムキになっているんだと、和弥はそんな自分にもイラついた。

春香は、何も言わない。和弥の心の中を見透^{みす}かすように、じっと見つめている。それだけなのに、後ろめたいような気がしてくる。^①

「何かをするためには、何かを我慢しなくちゃダメだろう」

それは、いつも塾^{じゅく}の先生が言っている言葉だと思い出し、さらに嫌^{いや}な気分になった。

春香といると、なぜか心をかきみだされる。もやもやと、霧^{きり}に包まれたような気分になる。

もう行こうと背中を向けようとしたとき、春香が「待って」と言っ、またかばんから何かを取り出した。

「これ、読んでみない？」

「は？」

それは、ぶあつい本だった。

「……オレ、本とか読まないから。そんな時間もないし」

自慢^{じまん}じゃないけれど、小さいころに絵本を読んで以来、ほとんど本を読んだことがない。国語の教科書と、夏休みの感想文のために読んだ、サッカー選手の伝記くらいだ。ましてや、こんなぶあつい本……時間があっても読まないだろう。

「本を読めば勉強にもなるよ。それ以外にも、いろいろ教えてくれるし」

「……いろいろって？」

和弥は、眉間^{みけん}にしわをよせた。

「今の和弥に必要なこと」

「何を言ってるんだよ……」

わけがわからなくて、イライラする。でも、春香のやることや言うことは、何か意味がありそうで、少しだけ気になった。

②「本って、不思議なんだ。たまたま本屋さんで見ついたり、雨宿りに入った図書館で手に取ったり、友だちが貸してくれたり……そんなふうに、偶然^{ぐうぜん}手にした本って、そのときの自分に必要なことを教えてくれるの」

「オレ、別に必要なこととかないから」

I そう言っても、

「まーまー、返すのはいつでもいいから、ね！」

と、無理やり本を押しつけて、春香はひょい^Aと後ろに下がった。

「じゃあね！」

^Bひらひらと手をふって、走り去っていく。

「うわ、重いな、これ」

和弥はそれを手早くリュックに入れると、駅に向かって走った。

塾から帰って、和弥はベッドにばた^たと倒れこんだ。

今日返ってきた、模擬^{もぎ}テストの結果は散々だった。

つかれた……。

一ミリも動けないけれど、宿題をやらなくちゃ。

リュックをたぐりよせたとたん、ズザザッと、なだれみたいにテキストや参考書が流れ落ちた。

その中に、オレンジ色の本がまぎれている。古めかしい繊細^{せんさい}な絵を見て、春香が貸してくれた本だと思い出した。

『モモ』と書かれている。これが題名？ モモって、果物？ 何かの名前？

「おかしい本だな」

作者は、ミヒヤエル・エンデという外国人。

これは、外国の話だろうか……いや、昔の話？ えっと、そうだ、こういう空想の話を、ファンタジーっていうんだっけ。そんなことを考えていると、たまたま開いたページの文に、目が吸いよせられた。

時間は貴重だ——むだにするな！

時は金なり——節約せよ！

息が止まった。

まるで、自分に向けられた言葉のような気がしたのだ。

③なんて嫌な本なんだ、と思うと同時に、和弥の中に興味がわいた。

表紙の角は、すりきれて丸くなっているし、黄ばんだページは折り曲げ^まられているから、春香はきつと、【 A 】と想像できた。はじめのページをめくる。

モモという、おかしくなかつこうをした、やせてちびの女の子が主人公だ。たったひとつの特技は、人の話を聞くこと。話を聞くこと？ そんなの特技のうちに入らないだろうと、あきれる。

でも、書かれていることによると、「ほんとうに聞くことのできる人は、めったにいない」^④ そうだ。

本を読むのは苦手だし、すぐくつかれているのに、和弥は次々とページをめくった。物語にぐいぐい引きこまれ、『モモ』の世界に入りこんだ。

ある都会の市街地に、灰色の男たち——時間どろぼうがやってきて、時間をぬすんでいく。時間をぬすむなんておかしいことだけど、やつらにはそれができるんだ。

例えば、日常の中のいろいろな時間を数字に置きかえて、数十年で、数億秒という時間がむだになると計算する。その分を時間貯蓄^{ちゆうちく}銀行に預ければ、利子をつけて返すと言って、甘い言葉^{あま}で誘惑^{ゆうわく}する。

その結果、人々は自分の時間をどんどん預け、時間に追われるようになるのだ。

「和弥、お風呂に入りなさい！」

母さんに呼ばれて、ハッと時計を見た。

^aわっ！ 二時間もむだにした！

……むだ？ 本を読んだ時間は、むだだったのか？

読みたかったわけじゃないから、むだだったのかもしれないけど……。

しおりのひもをはさんで、ぱたんと本を閉じた。

C
雨が降ったりやんだりして、はっきりしない天気が続いた。

塾に行くために駅に向かってしていると、市民グラウンドに、レッドフェニックスの連中がいた。今日は、ここで練習試合をしているのか。

塾の先生に「今のままじゃ、希望している中学は無理だ」と言われ、日曜の特別授業もはじめたから、土日のサッカー練習も行かなくなっていた。

監督には伝えてあるけれど、みんなには言っていないから、ついこそそしてしまふ。でも、やっぱり気になって横目でチラッと見ると、だれかがゴールに向かってつっぱしっていた。

それを見て、思わず大きな声で叫んだ。

「そのまま行け、行け！ 今だ、打てー！」

ザザッと、ボールがゴールに吸いこまれる。

「やったー！」

ガッツポーズをして、チームのやつにハイタッチされているのは……春香の弟？

健斗は、ドリブルが苦手で、よくみんなからバカにされていたのに……。

わーっと盛り上がるチームのみんなを見ていたら、和弥は一人、取り残されているような気分になった。

「和弥！」

バンツとリュックをたたかれて、
Ⅱ 振りむいた。

「なんだ、春香か」

まだ本を読み終えていない和弥は、なんとなく春香を避けていた。

「ねえ、健斗が、今度の試合に出してもらえるんだって。それで、土曜日、和弥に見に来てほしいって言ってたよ」

「え……なんで？」

「前に、健斗が練習しているのを見て、ほめてくれたんでしょ？」

「そうだったけ」

「うん。『おまえ、えらいなあ』って、言ってくれたって。あのとき健斗、サッカーをやめようとしてたんだ。下手で、自信がなくて」

ああ……。

健斗は、いつも早く来て練習しているし、熱心に質問してくる。そういうところが、えらいなって感じたことを思い出した。

「和弥が気づいてくれたから、がんばれたって言ってた」

「たまたま、だよ」

そう言っても、春香はまじめな顔で首をふった。

「和弥の筆箱には、消しゴムが二個入っているでしょう？　だれかに貸すために」

いきなり言われて、和弥は首をかしげた。

以前、となりに座^{すわ}っていたやつが、しょっちゅう消しゴムを忘れてきた。いちいち貸すのが面倒^{めんどう}で、いつのまにか、筆箱に二個いれてくるようになっただけだ。

でも……それから、忘れてきたやつや、なくしたやつに貸すために、念のため、二個いれてるけれど。どうして春香が、そんなことを知っているんだろう。

D
「和弥のそういうところ、すごいと思うし、好きだな」
は!?

好きだって？

びっくりすることをさらりと言われて、和弥の顔は真っ赤になった。

「じゃ、じゃあ」

駅に向かつて、あわてて走り出す。ドッドドットと、心臓が激しく鼓動^{こどう}した。

オレって、そんなにすごいかな……と、口元がゆるみそうになって、ふと立ち止まる。ちがう。オレがすごいわけじゃない。

春香だ。オレは、春香みたいになりたくて……。だれかのことを気にかけて、気づいてあげられるような人間になりたくて、春香をマネしてただけなんだ。

塾^{とちやう}に到着して席に座ると、リュックから筆箱を取り出した。

今日もテストだ。

みんなうつむいて、元気がない。ぼんやりとした空気は、かすみがかかっているように見えた。

E
テストが配られ、「はじめ」の合図とともに、いっせいに鉛筆^{えんぴつ}の音がさらさらと聞こえはじめる。鉛筆の先で、頭の中をひっかかっているように感じた。あせて、ぎゅっと目をつぶる。

ダメだ、はじめないと……。

筆箱を開けて、ハツとする。

⑤
消しゴムは、ひとつしか入っていなかった。

家に帰って、和弥はベッドに寝ころがった。

大の字になった手の指先に、本がふれる。

毎日少しずつ読んでいる『モモ』をひきよせて、続きを読みはじめた。

「人間というものは、ひとりひとりがそれぞれのじぶんの時間を持っている。そしてこの時間は、ほんとうにじぶんのものであるあいだだけ、生きた時間でいられるのだよ。」

ずいぶん、難しいことを言っている。いや、そんなことはないか。つまり、何に時間を使うのか、自分にとって何が大切かを考えるのが、生きるということなんだ。

灰色の男たちと戦い、みんなの時間を取りもどしたモモは、好きな人たちと再会した。そして、たっぷりある時間の中で、その喜びを分かち合う。少し変わっているけれど、勇敢で、思いやりのあるモモに、春香の姿が重なった。

『モモ』を最後まで読み切ったとき、^b読んだ時間がむだだったなんて、もう思わなかった。

本を閉じるのがさびしい……それは、生まれてはじめての感覚だ。

心にぽっかりと穴があいたように感じたけれど、その穴に、はちみつのようなとろりと温かいものが流れこみ、ふわっと埋めてくれた気がする。

前より少しだけ強くなった心は、和弥に勇気をあたえてくれるようだった。

(工藤純子「ぬすまれた時間と金色のパン」より)

※ 問題作成の都合上、文章の一部を省略したところがあります。

(注) * 監督……和弥が所属しているサッカーのクラブチーム「レッドフェニックス」の監督。

問一 ——— ①「後ろめたいような気がしてくる」とありますが、和弥はどのようなことに対してこのような気持ちになったのですか。そ

の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 受験勉強に集中したいという理由でサッカーの練習を休んでいるが、そのことでクラブチームの仲間迷惑をかけていること。

イ サッカーが好きなのにサッカーを我慢^{がまん}している現状にほんやりと迷いを感じているものの、その気持ちをこまかすような発言をしたこと。

ウ サッカーの練習を休んでいる本当の理由は、サッカーよりも受験勉強^{うしけん}をすることにやりがいを感じているからなのに、春香に嘘^{うそ}をついたこと。

エ サッカーの練習に出ないことを一方的に責めるような発言をする春香にいらだち、春香に思わず強い言葉を投げかけてしまったこと。

問二 ——— ②『本って、不思議なんだ』とありますが、本のこういうところが不思議だと春香は考えていますか。その説明として最も適

当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 学校や塾^{じゅく}では教わることができない、人生において必要なことを本が教えてくれるところ。
イ 自分にとって必要なことが書いてある本は、自分自身では見つけることができないところ。
ウ 読み手にとって必要な本かどうかは、本を最後まで読んでみないとわからないところ。
エ 読み手がめぐりあった本が、その時の読み手にとって必要なことを示してくれるところ。

問三 ——— I . II に当てはまる語句を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

I	ア 顔をしかめて	イ 顔を青くして	ウ 顔をかがやかせて	エ 顔をあげて
II	ア 目を回して	イ 目を光らせて	ウ 目を細くして	エ 目を丸くして

問四 ——— ③「なんて嫌^{いや}な本なんだ」とありますが、和弥がそのように感じたのはなぜですか。その理由を三十五字以上四十五字以内で答えなさい。

問五 ——— A Ⅰ に当てはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア この本があまり気に入らなかったのだろう
イ この本を大切にしまっておいたのだろう
ウ この本を何度も読んだのだろう
エ この本を長いこと放っておいたのだろう

問六

——④「物語にぐいぐい引きこまれ、『モモ』の世界に入りこんだ」とありますが、和弥が本に夢中になっていたことがわかる和弥の行動をこれより後の本文から一文で求め、最初の五字をぬき出しなさい。

問七

——⑤「消しゴムは、ひとつしか入っていなかった」とありますが、和弥は自分の筆箱に「消しゴム」が一つしか入っていないことから、自分自身についてあることに気がついたと考えられます。和弥がこの時に気がついたのはどういうことですか。三十字以上四十字以内で考えて答えなさい。

問八

——a「わっ！ 二時間もむだにした！」と、b「読んだ時間がむだだったなんて、もう思わなかった」について、aとbの部分は『モモ』を読み始めたときと読み終わったときの和弥の変化を端的に表わしています。その変化を説明した文として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 和弥は時間が足りず忙しくしていたが、時間に余裕を持つとうとするようになった。

イ 和弥は時間にしばられていたが、時間を気にせずに過ごそうとするようになった。

ウ 和弥は時間に対して注意を払わなかったが、時間を大切にしようとするようになった。

エ 和弥は時間に追われていたが、時間を自分のものとして使おうとするようになった。

問九

この文章の登場人物の言動に関する説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 和弥の両親は受験する息子を応援しているが、和弥の気持ちを置いてきぼりにしてしまっている様子も見られ、かえって和弥のプレッシャーになっている。

イ 和弥の通っている塾の先生は、和弥にとって頼もしい存在であり、受験勉強がなかなか進まない和弥を心配し、親身になって指導してくれる。

ウ 春香は、受験勉強で精神的に疲れている和弥が本を読むことで気分転換ができると確信し、その時に偶然持っていた『モモ』を和弥に貸した。

エ 周囲の人々に対する和弥の言動を春香は以前から快く思っていたが、和弥は春香に本を借りるまでは春香に対して特に関心を持っていなかった。

問十

本文の内容と表現の特徴の説明として最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア~~~~A「ひょいっと後ろに下がった」や~~~~B「ひらひらと手をふって」という表現は、春香が幼くていい加減な性格であることを暗示している。

イ~~~~C「雨が降ったりやんだりして、はつきりしない天気が続いた」という情景描写は、チームの輪に入れず取り残されている和弥の状況を表している。

ウ この物語は和弥に近い視点から描かれており、~~~~D「は!?／好きだって?」などの和弥の心の中のつぶやきが地の文にそのまま描かれている。

エ~~~~E「鉛筆の先で、頭の中をひっかかれているように感じた。」という比喩表現は、受験勉強でいらだっている生徒たちの攻撃性を示している。

三

次の①から⑧の——部のカタカナを漢字になおし、⑨から⑫の——部の漢字の読み方をひらがなで答えなさい。

① 先生のお宅をホウモンする。

② 商品の品質をホシヨウする。

③ 学校のセイフクに着がえる。

④ 新しい方法をトる。

⑤ ハンザイに手をそめる。

⑥ 縄跳びをハンプリクして練習する。

⑦ タイシユウに向けた番組を作る。

⑧ キキンゾクを店で商う。

⑨ 彼に白羽の矢を立てる。

⑩ 母直伝のみそ作りを教わる。

⑪ この虫は日本に広く生息している。

⑫ 他力本願で臨んではいけない。